

平成 27 年度 日 立 市 教 育 研 究 会 先 進 校 等 調 査 派 遣 研 修 報 告 書

日 立 市 立 平 沢 中 学 校 教 諭 高 野 陽 子

- 1 派遣期日 平成 27 年 7 月 26 日 (日)
- 2 研修先 会場名 幕張国際研修センター (学びの共同体夏期研究大会)
所在地 〒 261-0021 千葉県美浜区ひび野 1 丁目 1 番地
<http://japan.school-lc.com/>

3 研修内容

研究テーマ 学び合いによる授業づくり

(1) 分科会 (授業のビデオ視聴と研究協議)

3 年英語「現在完了形」牛久市立下根中学校 千葉幸子先生

3 年数学「平方根」 木島平村立木島平中学校 浅沼雅文先生

(2) 講演 長野県下高井郡木島平村教育長 丸山浩一氏

(3) 講話 学習院大学 佐藤学氏

(1) 選定の理由

本校では、言語活動を取り入れた授業実践を通じた確かな学力の定着をねらいとして学校課題研究に取り組んできたが、昨年度は、生徒が関わり合う双方向の言語活動をさらに充実させることが課題として残った。そこで、今年度は、言語活動の充実のための手立てとして学び合いについての研修を深めたいと考え、本研究大会を派遣先に選定した。

(2) 分科会

1 2 分科会の中で、中学校 4 の分科会に参加した。2 人の授業をビデオで視聴し、その後、グループで協議を行い、全体で質疑を行った。

① 3 年英語「現在完了形」牛久市立下根中学校 千葉幸子先生

本時の目標は、現在完了形を用いた文の構造、意味、用法を理解することである。4 人 1 組のグループでタブレット 1 台を使い、絵本「the Rainbow Fish」の読み聞かせの動画を見て、あらすじを理解することから授業が始まった。ネガティブスピーカーの読み聞かせは、内容を聞き取ることが難しい。生徒は、7 分間一言も話さずに取り組んでいた。

全体での内容把握後、空欄のある英語文と日本語訳のあるワークシートを配布し、空欄部分を聞き取る学習が始まった。再度タブレットに向かい、それぞれが聞き取った単語の意味をグループで確認する、その繰り返しによって英文を完成させる。約 15 分かけて 3 つの英文中、1 つだけ完成したグループもあった。聞き取った英文をもとに、過去形でも進行形でもなく現在完了形が使われていることの理由を全体で話し合った。ほとんどがグループでの学び合いの学習だった。

すべての課題がグループでの学び合いから始まり、一人では解決が困難な課題をグループで話し合うことで解決し理解を深めていた。

② 3 年数学「平方根」木島平村立木島平中学校 浅沼雅文先生

本時では、平方根の利用として、和算の中にも平方根の見方を活用して解決できる問題があることに気づくことをねらいとする。共通課題「方眼に書かれた直角二等辺三角形の斜辺の長さを求める。」は、斜辺を一辺とする正方形を書き加えることで既習の見方から求められる課題である。しかし、決して簡単な課題ではなく、

〔50 分の流れ〕

時間	活動内容 ※学習形態
2:30 ~	ウォームアップ 課題提示 (英語で指示) ※全体
4:25 ~	タブレットで物語を聞く。 ※グループ
11:15 ~	あらすじの確認をする。 ※全体→グループ→全体
15:00 ~	空欄を聞き取る。 ※グループ
24:30 ~	日本語訳を参考に空欄を聞き取る。 ※グループ
28:45 ~	英文①を確認する。 ※全体
31:30 ~	現在完了形を使った理由について考える。 ※グループ→全体
40:00 ~	現在完了形の意味を考える。 ※グループ→全体

〔50 分の流れ〕

時間	活動内容 ※学習形態
15:00 ~	共通課題に取り組む。 ※グループ→全体 ジャンプ課題に取り組む。 ※グループ

平方根の意味を十分に理解していなければ求めることができない。それを15分程度でまとめ、その解法をもとに、ジャンプ課題「1辺の長さが2寸のものに、1寸四方の正方形の金泊をはるとき、何枚必要になるかを求める。」に取り組んだ。ジャンプ問題の課題提示2分。すぐにグループでの課題解決が始まった。グループ内での試行錯誤は、授業の最後まで続き、全体で解法や解を確認することなく、授業が終了した。

参観後の協議では、解を知らせなかったことについての質問が出た。授業者からは、「平方根への理解を深めることがねらいである。だから、正解は今後も知らせない。」という返答があり、参観者からは驚きの声が上がった。

(3) 講演 長野県下高井郡木島平村教育長 丸山浩一氏

平成22年、3つの小学校が統合し村内の小学校が1校になったその年から、木島平村は学びのスタイルの変革に取り組み始め、現在は、小学校、中学校ともに、学びの共同体を形成している。それを「木島平型教育」と呼び、小中一貫教育と学校のコミュニティ化によってその充実を図っている。

①一貫教育の視点

視点1 学校運営の基本を「学びの共同体を基礎に置く学校づくり」とする。

視点2 協同的な学びでつなぐ一貫教育により、「自立した学び手」を育成する。

視点3 発達段階に応じる指導と地域との連携で教育システムを構築する。

②協同的な学び

- ・教師が一方的に説明するだけの一斉授業から脱却して、子供が主体的に学び合う協同的な学びを構築し、すべての子供の学びを保証する教育を目指す。
- ・対話型コミュニケーションを中心に課題について少人数で互恵的に学び、子ども同士、子どもと教師の愛憎に聞き合う関係を築いて室の高に学びを目指す。
- ・4人以下の少人数の学び合いは、一人一人に自発的な学びを促す機能がある。どの子どもも学びに参加することが誘発され、すべての子どもに学ぶ権利を保障することができる。
- ・分からない子どもの「ここどうするの?」という問いから学び合いが始まる。他者を援助を媒介とする思考によって、分からない子どもは一人で学ぶことの限界を超えることができる。

(4) 講話 学習院大学 佐藤学氏

「質の高い授業」という場合の質は、「ジャンプのある学びと真性の学び」「聞き合い学び合う関係」「子どもの受動的能動性・自分づくり」である。これらが互いに交わり合い、その中心に「夢中になって学ぶ授業」がある。

低学力層や学習内容が理解できない子どもの困り感が取り残され、無気力な子どもが生まれる。友達と共に学び合う協同的な学びは、学びの本質であり、「教えて」と気軽に訊ける、どんなことにも聴いてくれるということが信頼になる。協同的な学びは、結果としての学力以上に、関係の良さや能動性を引き出し、生徒の将来に希望を与える。

4 感想

今回の研修に参加して、「学びの共同体」として学校が目指す「学び合い」について、理論・実践の両面から多くのことを学んだ。驚くことが多かった。教師は説明しない、生徒の言葉（考え）をつなぐ存在だということ、グループ学習では子ども間で「教えようか」は言わせない、分からない生徒が「教えて」と言える関係を作ること、分からないことから学習が始まるなど、これまでの授業づくりの概念が大きく変わる研修になった。また、学習課題の与え方や内容についても学ぶことが多かった。共通問題とジャンプ問題というとらえ方があり、一人では解けないジャンプ問題を与えることで学び合いによる「真の学び」が始まることを知った。これまでも、課題の大切さは理解していたつもりだったが、分科会での学習課題とその展開は、これまでの考えを超えるものだった。学び続ける生徒の姿から、佐藤学氏の話された「真の学び」を感じることができた。

この研修会で学んだことをさらに深めたいと考え、この研修前後に、他の「学びの共同体」の研修会にも参加させていただいた。多くの先生方の「真の学び」を追求する熱い思いに触れ、子どもの学びを保証するという教師の役割を果たすために、今後も研修を重ねていかなければならないという思いを強くした。この研修で学んだことを本校の先生方に伝え、学校課題研究をさらに充実させていきたい。